だいちゃんのだいぼうけん・番外編

# ～狐と泉～

～西風　そら～

この作品の著作権は、西風そらにあります

http://nisikaze.sakura.ne.jp

小さな谷で一晩を明かす事になり、風すっかが焚き火を起こし、柿ただちゃんがチャパティをこねている

水汲みに行っていただいちゃんが帰って来た。

「随分、時間かかったね。水場、遠かった?」

「ううん、すぐそこだったけれど…」

「どうしたの?」

「うん、ちょっと色々あって…。あっ、頼まれ事されたんだけれど。そこで会ったこの谷のヒトに。どうした物かと…。一緒に考えてくれる?」

二人は頷いて、それぞれの仕事をしながらだいちゃんの話に耳を傾けた。

＊＊＊

水を汲みに谷に降りただいちゃんは、すぐに綺麗な清水の湧き出る小さな泉を見つけた。水を汲もうとすると、咳払いがした。

見ると、耳の大きな狐のおばあさんが、泉の畔の岩に、座布団を敷いて座っている。

「こんにちは」

だいちゃんは普通に挨拶をした。

「こんにちはだって！　こんにちはだって！　こんにちはだって！　まあ!!」

狐は突然スイッチが入ったように喋り出した。

何かいけなかったのだろうか？　もしかしてこの泉は自由に水を汲んではいけない場所なのかなあ？　でもそれなら、何か言われる筈だ。

だいちゃんは動きを止めてじっと待った。しかし狐はまた黙ってしまった。

だいちゃんはしばらく待ったが、狐はだいちゃんから半分目をそらして黙っている。困ったなあ、水を汲んでもいいんだろうか？

こんな時、風すっかなら、山から湧きだしている水は誰の物でもない！　と自信を持って堂々と汲んで、関わり合いにならない内にとっとと立ち去るだろう。

柿ただちゃんなら、狐と苦もなく会話して、じゃあ失礼しますと和やかな内に水を汲めるだろう。

自分はどうした物か……。

悩んでいる内に、この谷の住人らしい木霊の女のヒトが、小さな瓶を抱えて水を汲みに来た。

狐を見ると、目を合わさずに会釈した。
「あらあらまあまあああらあらあら…」
また狐が声を発した。もしかしたら意味のある言葉を喋れないのかもしれない、と思ったが、次にやっと意味のある文章を喋った。
「随分久しぶりね、ほらアナタ、昨日来なかったじゃない、あらあら、どうしてたの？　珍しい、でも、ほら、あの、あのヒト、どこだったかの、あのヒトも来ないのよ、私心配でねえ、あらアナタもう行くの？　おとなしいヒトねえ、損よ、ほら、どこだったかのあのヒトもおとなしいけどねえ…」
…いや、意味があるとは言えないか…。

だいちゃんは話が途切れるのを待って、木霊に水を汲んでもいいか聞こうと待っていたけれど、どうも一部の隙もなく意味のない単語が続くので、疲れてしまって、そこを離れた。
谷に降りれば流れのひとつもあるだろう。あそこで単語の羅列が終わるのを待っているよりも早いし、楽な気がした。
少し下って茂みを潜ると、さっきの木霊が横から出て来た。追ってきたのか、息を弾ませて、自分の瓶を突き出す。
だいちゃんが戸惑っていると、進み出て、だいちゃんの水筒に水を注いでくれた。しかし小さな瓶なので、水筒の半分も満たせなかった。
「もう一杯汲んで来るから、ここで待っていて下さい」
「え？　僕…、僕いいです！」
「いいから、待っていて下さい。泉に来ちゃいけませんよ」
程なくして、瓶を満たして戻って来た木霊は、水筒に水を注ぎながら、ポソッと呟いた。
「すみませんねぇ…」
「えっ？　あっ、こちらこそ、有難うございますっ」
木霊に謝られるような事は何もないので、だいちゃんは困ってしまった。

「あの木の横の道を登ると、泉を通らないで上の道に出られます」
木霊は親切にも道まで教えてくれ、瓶の底に残った水を自分の膝にかけた。
だいちゃんが見ているので、独り言のように、
「また水を汲みに行く言い訳しなきゃいけないから…、明日の夕方には、二回も水をこぼした粗忽者って谷のみんなに広まっているわ」

「あの…すみません…なんだか…」
「あら、貴方は悪くないの、何も悪くないのよ。気にしちゃいけませんよ、じゃあね…」
だいちゃんは教えて貰った道を登った。上の道に出た所で、またさっきの木霊に逢った。
「あら…」
木霊は更に疲れた感じだった。あの単語の羅列に二回も余分に付き合わされたからだろう。
「あの、…せめてその瓶を運ばせて下さい」

＊＊＊

「ふーん…」
風すっかは、いつもはたっぷり沸かす食後のお茶を、きっちり人数分しか入れなかった。水を節約して、明日の朝食まで保たせるつもりだろう。何故かって？　明日の水汲み当番は、風すっかだから。
「それで、それで♪」
柿ただちゃんは脳天気に話の続きをせがんだ。野次馬気質は、たまに話している側の心を軽くしてくれるんだけれどね。

＊＊＊

「あの……、貴方は新しくここに来られたの？　それとも旅の方ですか？」

「僕は旅をしています、友達と三人で」

だいちゃんは瓶を運びながら、道々木霊と話をした。

「じゃあ、通りすがり？　すぐに何処かへ行ってしまうの？」

「そうですね、ここにはあんまり長居しないと思います」

水が汲めないなら…、と続ける言葉は飲み込んだ、…が、木霊には分かったのだろう。

「すみませんねぇ…」

溜め息まじりに呟く。

「あの……、時間があったらちょっとだけ話を聞いてくれませんか？」

＊＊＊

「うわぁ……、それで、話を聞いちゃったの？」

基本、困っているヒトは助けよう気質の風すっかでさえ、すんごい嫌な顔をした。

「あら、まだ話も聞いてないのに」

柿ただちゃんが、カップの底のお茶をチビチビ飲みながら言った。

「だいたい予想つくよ…」

「すみませんねぇ…」

だいちゃんは肩をすくめた。

＊＊＊

泉は、昔はこの辺りの住人の憩いの場だったらしい。

ある日、谷に狐の一家が引っ越してきた。夫婦と子供三人、そして大きな耳のおばあさん。

谷の住人は、狭い所に住む者特有の排他的な警戒心が無かった。幸い、というか、外界の者に酷い目にあった歴史がないのだ。皆、親切で好意的だった。

新しく越してきた狐の家族は、子供が三人もいたのもあって、優しく迎えられた。

その頃の泉の周りは、皆の社交場で、誰かしらの置いてくれた椅子やテーブルがあり、花なども植えられていた。

水を汲みに来た住人達は挨拶を交わし、新しい料理だの、野菜が実ったの、文字通りの井戸端会議に花を咲かせた。

子供達はここで、年上の子に様々な事を教わり、年下の子を

庇護する事を覚えた。

親切な住人が、まず狐のお母さんを、この社交場にいざなった。お母さん狐は、皆に挨拶し、軽やかに仲間入りした。

水を汲みに来る度、皆と二言三言笑い合い、時には狐のお父さんや子供達も一緒に訪れた。

近しい友人も出来た。だいちゃんに話をした木霊さんがそうだった。

そうだったと過去形なのは、狐のお母さんはもうこの谷にいないのだ。お父さんも子供達も、もういない。

＊＊＊

「なんか…、すんごい聞くのが怖い話…。この後、重〜くなるんだろ?」

「まあね、…やめとく?」

「いや、聞かなきゃ知恵も出せないからね、ちゃんと最後まで聞くよ」

柿ただちゃんも珍しく黙って、真剣に聞いている。

＊＊＊

「でもね、みんなちょっと、不思議に思っていたの。狐のお母さんは、一度もおばあさんを伴っては水汲みに来なかったの。それは、多分、みんなの為を思っての事だったんだけれど…。みんながそれに気付いたのは、ずっとずっと、ずっとずっと、後だった…」

木霊さんは寂しそうにうつむいて、地面を見つめた。

狐のおばあさんが泉にやって来たのは、越して来てからふた月程経った頃。気まぐれに散歩して、たまたま迷い込んだらしい。

その場にいた親切な住人が、お母さんと同じように皆の中にいざなった。

しかしお母さんの時と違った。

憩いの場は、たちまち重苦しく、すぐにでも立ち去りたい空気になった。体験した事のない得体の知れぬ不快に包まれ、辟易してその場を離れた住人が帰る道々、お互いに確認して、ようよう原因が見えて来た。

狐のおばあさんは、まず、ここを教えてくれなかったお母さん狐の悪口を喋った。それくらいなら、年寄りにはよくある事。

ここの住人は、過ぎた悪口になると、するりと話題を転換す

る上品さを持ち合わせていた。言った方もそれで気付き、反省したものだ。

しかし、避けても避けてもおばあさんは悪口を蒸し返した。

その頃はまだ、貴方、悪口メインの会話をしていると、自分の所に返って来ますよ、と正論を言える住人がいた。

おばあさんは一時黙るが、その住人が水瓶を持っていなくなると、眉間にシワ根を寄せて、まあ、あのヒトの知ったかぶりな事、と不快な声を撒き散らした。

皆、基本、水汲みに来ているのだから、長居するものでもないのに、それではおちおち立ち去れない。誰だって去った直後にあれこれ言われるのは嫌な物。

相手にせずに別の所で楽しい会話をしても、いや、私はこうだ、と無理に会話に押し入って、自分の愚痴を話し出す。

そして、例の隙間のない単語の羅列で、他の者同士の会話を許さないのだ。

それでも、まだ親切心を失わない住人が、それより貴方の事が聞きたいわ、と振ると、自慢話と自分が可哀想だと言う話のオンパレード…。

「自慢話くらいは誰でもするし、聞いていて楽しい自慢もあるわ。でも、おばあさんの自慢話は…」

どういう角度から聞いても、凄くもないし、羨ましくもない、どーでもいい自慢だった。

要するに自慢出来る素晴らしい物は、何も持ち合わせていないのだ。可哀想話も同様だった。

それでも愛想で、凄いわね、それは大変ね、と言ってくれる住人がいたのがいけなかった。おばあさんは愛想を知らなかった。世間の百万の同調を得た気持ちになるのだ。

水汲み場はそういう種類の者にとっては、絶好の猟場だったのだ。

次の日からおばあさんは、水瓶も持たずに水汲み場に来ては、不快なお喋りをするようになった。

「それに、悪口って恐いのよ…。聞き流しているつもりでも、繰り返し聞くと、頭のどこかに残るのね。住人の間も何処となくギスギスして、皆それに気づいていたから、おばあさんに悪口を言い触らされるのが恐かったの」

気の毒なのは、最初におばあさんに何がしか意見をした住人達だった。

水を汲みに行くと、必ずおばあさんがいて、ツンと無視をする。先客がいると、おばあさんはわざと先客とヒソヒソ話をする振りをして、横目でねめつけるのだ。何にも悪い事をしていないのに、彼等は泉に行く度に不快な目に遭った。

もっともヒトに意見の出来るような快活な人種は、体も元気で、バイタリティーに富んでいたりする。

彼等は泉をスルーして、下の沢に水汲みに行くようになった。下の沢に行く体力もない、弱い小さい住人達は、快活な彼等との楽しい交流を失った。

そんなんだから、おばあさんと親身に会話をしようとする者は皆無になった。会釈か、生返事がいい所。

それではおばあさんの欲求はますます満たされない。自分は会話する気はないのに、相手には受け答えを要求するのだ。

そしてとうとう、おばあさんは座布団を持ち込んで、朝から晩まで泉に居座るようになったのだ。

そうなると、泉はもう憩いの場ではない。

まず、椅子とテーブルを提供していた住人が、ごめんね、うちで使う事になったから…、と引き揚げた。あんなおばあさんに1日座られているのが忌々しいのだ。

花を植えていた住人も、こっそり持ち帰った。花が可哀想に思えたからだ。

泉に近寄るのもはばかられるので、掃除や草刈りも誰もしなくなった。かくして泉は見る影もなく、草ぼうぼうの廃墟となる。

ここで、木霊サンは一拍置いた。

「貴方だったら、どういう対策を考える?」

「家族の人に訴えるね。何とかしてくれって」

「そう、狐のお母さん…、もう、その頃には肩身が狭くなって、誰に会っても顔を伏せるし、気の毒なくらいだったけれど…。私がね、近しい友人だったから、言いに行く役目になったの。それで…、行ってみたらね、子供達はとうに家を捨ててどこかへ行ってしまってた。お父さんも見えなかったわ。聞けなかったけれど…」

狐の家族が引っ越して来たのは、前に住んでいた所でも、同じような事になったからだった。

その前に住んでいた所でも…、その前も…。

「狐のお母さんは、もう慣れっこみたいな、覚めた顔をしてた。それで……、いなくなったの…、次の日…」

＊＊＊

風すっかは鉛のような溜め息を吐いた。

柿ただちゃんも、いつもならとっくにお眠(ねむ)の時間なのに、眉間にシワを寄せて考え込んでいる。

「僕達は二十メートルの水の触手を擁するヒト喰い湖と闘った。火を吐く大猫とも闘った。それらが可愛く思えるね」

「風すっかは、どういう所がそれほど恐ろしいと思う?」

「たかがお喋りで一家を離散させ、ひとつの集落の平和をいとも簡単に崩壊する。その最凶のウエポンを擁するばあさんが、破壊大魔王の自覚がまったくない…って所かな? 罪の意識がない、意志が存在しない、対処の実体がないんだ」

「うん、木霊サンもそれ、言っていた。悪意があったら、対処出来る…、悪意と罪の意識は背中合わせだからね。家族に捨てられ、周囲に早死にを望まれ、どん底の不幸の筈なのに、まだまだ、自分で蟻地獄を堀り続ける負のパワー。そのパワーが、気持ち悪くて、怖いって」

「まあ、それで、恨まれても明日にはいなくなる僕らに、ズバリと言ってくれって事か」

「そういう事です…、ごめん…」

「高い水一杯だね」

「風すっか!!」

柿ただちゃんが沈黙を破った。

「は、はいっ」

「お茶入れて!!」

「え…うん、……はい…」

「大丈夫! 明日の朝一番、ただちゃんが水を汲みに行く!」

「……」

「虎穴に入らずんばバターを得ずよ!!」

＊＊＊

翌朝、柿ただちゃんは、だいちゃんのでっかい水筒を頭に乗せて、谷へ降りて行った。

だいちゃんと風すっかが物陰からそっと着いて行く。

泉に降りると、朝っぱらから…もしかしたら一晩中いたのかもしれないが…、大きな耳の狐のおばあさんがいた。座布団の周りは何やらの食べかすが散らばっている。

「おはようございます!」

軽いジャブだ。

「まあまあまあまあ、おはようだって、おはようだって、へえ〜」

スウェーされた。
「この泉の水を汲みたいの、よろしいかしら?」
ジャブ。
「へえ〜、そんな事言ったって、アンタそりゃアンタ、私はここは古いですけどね、ここにずっと座ってて、もう腰が痛くて痛くて」
またスウェー。
「この水筒、私には大きいの、手伝って下さらない?」
スウェー返し。
「アンタ、常識で考えなさい、アンタ、普通違うでしょ、普通。いいとも、いいともさ、腰が痛いけれども、足も冷えてるけれども、アンタが手伝えと言うなら哀れなアタシは体に鞭打って手伝ってやるともさ」
おお、いきなりカカト落としだ。
「無理に手伝ってくれなくてもよろしくてよ、半分だけ汲みますわ」
「おや、おーおー、その水筒は、昨日の無礼な生き物が持っていたねー」
「無礼? 友人が何か失礼をしましたか?」
「無礼も無礼! 機嫌が悪いのかずっと黙ったきり、あれじゃこっちだって気分悪いよ。アレは、アレだね、頭の回転が悪いんだね、だから喋れないんだよ」
だいちゃんは木陰から飛び出しそうになった。アンタが黙ってたから僕も黙っちゃったんじゃないか!
木霊サン達の気持ちが分かった。これは、ひとかけらも関わり合いになりたくなかろう。
「私の友人は無礼じゃありませんわ。思慮深いだけです!」
だいちゃんが柿ただちゃんをこんなに抱きしめたくなったのは初めてだ。
「アンタ、あれだね、ヒトの言う事を聞かない子だね、アタシャずっとこの谷にいてね、何でも知ってるさ、なーんでも、別に凄かないけどね」
「ええ、ちっとも凄くありませんわ。『無知の知』ってご存知?」
「言葉をそのままとるんじゃないよ、いい? アンタ、そんな事じゃイケナイよ、みんなに嫌われるよ、アンタ、まあ、幸いアタシは寛容で物知りだからぜーんぜん、気にしないけどね、ここはね、みんなの憩いの場、わかる? 憩いの場、みんなが楽しく過ごす所だよ、情報交換なんかしてね、ここのヒト達はみんな大人しいからアタシがね、明るく取り仕切ってあげない

とね、みんな感謝してるんだよ、アタシがね、いいんだけどね、腰も痛いし足も冷えるけど、アタシがね、身体に鞭打ってみんなの為に明るくね、アタシがね、ここにいてやっているんだよ」

柿だだちゃんは澄ました顔で水を汲み終えた。

「では、ご機嫌よう、『アタシがね』サン」

まだ何か喋っているおばあさんに背を向け、スタスタスタと泉を後にした。

だいちゃんが水筒を受け取って、柿だだちゃんをはぐはぐした。

「あれ?」

よく見ると、柿だだちゃんは白目を剥いて、耳から煙を吹いている。

＊＊＊

「相当難解だわ」

柿だだちゃんは、オーバーヒートした前頭葉を冷やしながら、目を閉じて考え込んでいる。

「水一杯汲むだけで、こんなにダメージ食らうなんて」

「やっぱボクが行く?」

確かにシビアで口が立つ風すっかなら、どうにかなるかもしれない。

「それは駄目」

「どうして? 柿だだちゃん。毒舌戦なら風すっかにも勝機がありそうだけれど」

「狐のおばあさんの毒舌と風すっかのスパイシートークは、肝心な所が違うのよ」

「なに?」

「おばあさんはどんだけ喋っても垂れ流しだけれど、風すっかは言った言葉に責任を持つから。人を傷つける言葉を喋ったら、自分も同じだけ傷付くのよ。勝負になる訳ないわ」

「……」

「あのおばあさんを打ち負かす程喋ったら、風すっかは病気になって倒れてしまうわ」

風すっかは黙ってしまって、柿だだちゃんを見た。

柿だだちゃんは時々サラリとこういう事を言う。戒律厳しく気難しい風の精が、種族の違う柿だだちゃんと、ずっと一緒にいられるのは、こういった所が理由なんだろう。

だいちゃんが、この二人といるのが大好きなのは、時々そういった事を教わるからだ。

「あのおばあさんの中身を変えるのは無理ね」
「木霊サンの口振りでは、あの泉に居座るのをやめて欲しいだけみたいだよ。ボク、思うんだけれど、泉の畔は、谷の住人にとって、失ってみて初めて分かった大切な物だったんじゃないかな。木霊サン、本当に寂しそうだった…」
「じゃあ、ミッションは泉の畔を住人に返すって事だね。一時凌ぎでなく」
「うーん…」

「取りあえず朝ご飯にしましょう。脳に栄養送らなきゃ、考えも浮かばないわ」
　柿だだちゃんは、昨日のチャパティの残りとチーズで、熱々のパンスープを手早くこしらえた。
「わーい、こりゃ温まりそうだ」
「いただきます！」
「お…？」
「柿だだちゃん、これ…？」
　スープを食べるだいちゃんと風すっかの手が早まった。
「ふ・ふ・ふ・・・♪」
「美味し～い～！　何？　このくにゅくにゅしたの」
「初めて食べる～。まったりとして、それでいてしつこくなく…、何だろ？　これ」
「ふ・ふ・ふ・・・今日のスープはスペシャル・サプライズよ」
「何？　何？　教えてよ」
「それはね…」
　柿だだちゃんは一呼吸置いて言った。
「聞かない方がいいわっ♪」
「何だよ、それ」
「気になるよ、教えてよ」
「正体を知ると、食欲なくなるかもよ～」
「ええっ?!」
「何、食べさせるんだよ！」
「あら、ちゃんとした食材よ、栄養も満点なのよ」
　柿だだちゃんは自分でスープをすすって見せた。
「ただ、ちょっとイメージの良くない物なの。だから、知らない方が美味しく食べられるわ。知っているだだちゃんより、知らない二人の方が、絶対、より美味しいはずよ！」
「…ん・ん～～？　そういうもんか？」
「昨日、通った沼で見つけたの」
「沼ぁ？　おーい、気になるよお！」

「これだ!!」
「何？　風すっか、このくにゅくにゅの正体分かったの？」
「違うよ、今の柿ただちゃんの言葉でピンと来たんだ」
「へ？」
「聞かない方がいい、知らない方が幸せ！　…これ、イケるかも！」
「なになに？　教えてよー」
「うん、木霊サンに、信頼出来て口の固い住人を集めて貰って」
「住民はおばあさんを恐れている。協力してくれるかなあ？」
「おばあさんの逆鱗に触れないやり方なら、協力してくれるよ。何より、自分達の事じゃん。それに、皆さんのストレスも、ちょっぴり解消出来ちゃうかもだよ」

＊＊＊

狐のおばあさんの耳は、何一つ聞き漏らすものかと、アンテナのように左右に動かしているうちに、大きくなった。
特に、自分がいない時に自分の悪口を言われないようにしなくちゃ。いない者の悪口を言うのは世間のジョーシキですからね。朝から晩までここにいれば安心だわよ。

ふふふ・・、と笑い声が聞こえて、木霊が笑顔で瓶を抱えて泉に降りてくる。
いつもは顔を伏せて無表情なヒトが、どうしたんだろう？
「おやおや、まあまあ、何笑ってるんだか」
木霊は、何を言われてもニコニコしながら、水を汲んで、おばあさんを見た。
「あら、狐さん、可笑しいのよ、あのね…」

「ちょーっと待ったあ！」
別の木霊が駆け降りてきた。こちらも満面の笑みだ。
「言っちゃ駄目！　狐さんの楽しみを奪う事になるよ。なんせ、アレは、あらかじめ知っていたら、面白さ台なしなんだから」
「そうね、ふふふ」
「何だよ何だよ、アタシを仲間外れにしようってのかい？　そんな事普通しないよ、社交場のルールってのはね・・」
「駄目よ、口で言ってもあまり面白くないの、知らない方が幸せよ。アレに初めて出くわした時の面白さを味わえるんだから。何せ、アレ、と来たら…ぷ・くくく・・」
「あははは」

二人の木霊は、喋り続けるおばあさんの意味のない言葉に重ねて、自分達の楽しい会話をした。やってみたら出来るもんだ。

「聞いている人不在の話は、頑張って聞いていなくていいんだよ。一人で勝手に喋っているだけなんだから」

風すっかのスパイシーな一言が、住人達の肩の力を抜いた。

おばあさんは喋るのを途中で止めて、二人の会話に聞き入った。何処か入り口はないかしら？　自分中心の話に持って行ける糸口は？

しかし『知らない方が幸せなアレ』の話では、知ったか振りも出来ない。

二人の木霊は、顔を見合わせて、楽しそうに笑い合った。しばらく振りの、泉の畔の笑顔だった。

その日一日はそんな感じだった。水汲みに来るほとんどの者が、何か楽しい事を抱えていて、ニコニコしている。

おばあさんが聞いても、『知らない方が楽しめる』という『好意』で、誰も教えてくれない。

自分が泉なんかに居座っている間に、何処か知らない所で何か面白い事が展開されてるのだ。

おばあさんはたちまち自分の立場を『損』と考えるようになった。自分の王国だった泉が、価値のないつまらない物に思えた。

＊＊＊

木霊サンが、昨日とは打って変わった笑顔で、だいちゃん達の所へ水を持って来てくれた。

「お水ありがとう、木霊サン。もう、演技しなくていいのに、笑顔、張り付いちゃった？」

「うふふ、これは本心からの笑顔よ。ずっと笑う事なんて忘れていたみたい。久しぶりに、泉の横でお友達と笑い合って、本当に幸せだったって思い出したの。それにね、ちょっぴり卑しいんだけれど、狐さんのオロオロした感じが溜飲を下げてくれた。なんだか、前程怖くなくなったかもしれないわ」

風すっかの『泉に張り付いている事をつまらなく思わせる作戦』に、『みんな笑顔で』と、付け足したのは柿だだちゃんだ。

「特に作戦的意味はないわ。ただ、笑っている事はパワーを生むのよ。おばあさんが今回、一時的に泉を離れたとしても、憩いの場を取り戻すには、やっぱり住人の皆さんのパワーが必要だと思うの」

「おばあさんの悪口と単語の羅列に振り回されない強い結束力だね」

＊＊＊

次の朝、ついに泉におばあさんの姿がなかった。幻の『アレ』を探して谷をほっつき歩いているらしい。

「本当に『アレ』を見つけられればいいんだけれど」

「え、風すっか、『アレ』ってまったくのデタラメなんでしょ？」

出発の準備をしながら、だいちゃんが聞いた。

「ん、でも、おばあさんの中には存在するんだ。おばあさんが、ああ、これだ！　って納得いった物を見つけられたら、それが『アレ』になるんだよ。そうしたら、泉の横でくっちゃべってるだけの人生をつまらなく思えるんじゃないかな？　まあ、それはボクの理想で、現実はそんな上手くいかないと思うけれど」

「風すっかの理想が叶うといいわね…」

柿だだちゃんが木立の間から、離れた岩の上を見やった。

狐のおばあさんが、ショールを風に揺らしながら、空を見上げてくしゃみをしている。多分、久し振りに、空なんて見たんだろう。

自分達は知恵を出してきっかけを作っただけだ。後はやっぱり、当事者の、谷の住人達の頑張りだろう。

ゆうべ、泉を離れていた快活な住人も交えて、話し合いが持たれた。だいちゃん達はオブザーバーとして招かれた。

「ルールを作る事にしましょう」

一人が提案した。

「これからの私達は、ちょっと面倒だけれど、ルールを作って、他から来た人も受け入れるか、外来者を拒否して、暗黙の了解だけで平和に暮らせる者のみで生きてくか、どちらかの道を決めなくてはいけないと思います」

みな、たっぷり考えてうなずいた。飲み込みが遅い者にも、理解するまで待ってあげた。

「外来者を拒むのは簡単だけれど、今回、私達が変わるきっかけを作ってくれたのは、外から来た人達なのよ」

みんなの目がだいちゃん達に注がれて、三人はうつむいた。三人ともそういうのには凄く慣れていなかった。

みんなで考えて作った一つ目のルールは、

『みんなで力を合わせる』。

単純過ぎる…と思われるかも知れないが、これが出来なかったから、泉の畔を失ったのだ。

一人一人でいないで、勇気を出して、みんなが声をかけ合っていれば、結果は違っていたかも知れない。
狐のお母さんや家族にも、声をかけていれば……。

＊＊＊

「さあ、行こう」
三人は荷物を担いで歩き出した。
「あ…？」
木霊サンが来た。
「あの、お礼を言いに…。今朝、久しぶりにのんびりと水を汲んだの。泉に自分の笑顔が写るのも久しぶりで。今度こそ、あの場所を大事にするわ」
「うん、見ず知らずの僕に何回も水を汲んでくれた、木霊サンなら、出来るよ」
「ありがとう、あ、それと……」
木霊サンは肩掛け鞄から何やら袋を取り出して、柿ただちゃんに渡した。
「これ、三人ともお好きだって言っていたから」
「あー、あれね。わあ、こんなに？　ありがとう！　この辺の沼にはよくいるの？」
「ええ、私も好きよ」
だいちゃんと風すっかは、その袋を凝視した。何やらばいんばいん動いている。
「あの…それ…？」
二人は声を揃えて聞いた。
柿ただちゃんは袋を素早く風呂敷に押し込んだ。そして、木霊サンと声を揃えて言った。
「知らない方が幸せよ！」

ばいん。

～おしまい～

二〇〇九・一〇・某